

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 4 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520234

研究課題名（和文）ワーズワスにおける湖水地方の農民像の研究

研究課題名（英文）A Study of Wordsworth's Ideas about the Farmers of  
the Lake District

研究代表者

小田 友弥 (ODA TOMOYA)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：20085468

研究成果の概要（和文）：ワーズワスの作品において、ステイツマンと呼ばれる湖水地方の小自営農民に重要な役割が与えられているが、彼が提示する農民像と現実の農民には齟齬があった。これまでこの齟齬の由来は、彼の政治信条の右傾化などと絡めて研究されてきたが、納得のゆくものではなかった。本研究では、彼の農民像には共和主義の農民観が影響を与えていることや、彼がなぜそうした農民観に依拠したのかを究明し、齟齬が生じた理由を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Independent farmers of the Lake District, usually called statesmen, play very important roles in the works of William Wordsworth. But his description of them has some significant differences with the real statesmen. It has been long studied why these differences came about, but there has been no convincing explanation. In this study I make it clear that Wordsworth's ideas of the Lakes farmers are greatly influenced by the republican view of independent farmers, and his recourse to republicanism is the main cause of these differences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英文学

## 1. 研究開始当初の背景

「マイケル」、「兄弟」、『グラスミアの我が家』、『序曲』、『湖水地方案内』などの作品から窺われるように、質朴・勤勉な湖水地方の小規模自営農民ステイツマンは、ワーズワスの詩作品や自然観、人生観の中心に位置して

いる。そのために、これまで多くの研究者が、牧歌や農耕詩、自然保護意識などの視点から、彼の農民像を取り上げてきた。しかしこうした研究では、例えば David Simpson, *Wordsworth's Historical Imagination: The Poetry of Replacement* (1987) と Jonathan

Bate, *Romantic Ecology: Wordsworth and Environmental Tradition* (1991)に正反対の見解が示されているように、ワーズワスの湖水地方の農民像について、意見の一致には至っていない。とりわけ見解が分かれるのは、彼の農民像が虚なのか実なのか、虚であるにしても、彼がなぜそのような農民像を主要作品で称揚し、広く世間に知らしめたのか、という点である。私は、先行研究におけるこの不一致は、問題を扱うに際しての重要なファクターが欠落しているためだと想定した。

## 2. 研究の目的

本研究では、「研究開始当初の背景」で触れた、ワーズワスの農民像を研究する際に欠落しているものは共和主義的視点だと考えた。西洋には、古代ギリシャ、ローマ時代のアリストテレスやキケロから発する共和主義の伝統がある。それはイタリア・ルネサンス期のマキャベリを経て、17世紀後半にはファリントンやシドニーによりイングランドに移入された。そして共和主義的伝統は、それぞれの時代の政治や経済、文化状況に応じて変化しながら、今日に至っている。共和主義には幾多の側面があるが、古今を通じて揺るがぬ核心的テーゼがある。その一つが、健全な共和国を支えるのは、小規模自営独立農民だという考えである。

ワーズワスが描く湖水地方の農民像には、共和主義が理想とする農民と多くの共通点がある。しかもワーズワスには、フランス革命の体験など、共和主義との接点を持っている。そこから、彼の農民像の源流を共和主義まで辿ることにより、彼の農民像に関わる問題を解決するのが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の三つの角度から考察を進め、最後に総合し結論に至る形をとった。

(1) 共和主義の伝統とその農民像の確認。古代ギリシャ、ローマの時代からの共和主義の流れを、主要な文献や研究書をもとに辿り、共和主義的な農民像がどのようなものか鮮明にする。また、共和主義的な言説が、ワーズワスと関わる18世紀後半から19世紀にかけて、どのように用いられていたかを示す。

(2) 主として18世紀後半からの湖水地方関連書籍で述べられている、湖水地方農民の特徴を調査する。そうした書籍としては①歴史書、農業書、地誌書などの学術的傾向を有するものと、②湖水地方への旅行記・旅行案内がある。(科学研究費補助金では、この分野の入手が難しい古書を相当数購入できた。)

(3) ワーズワスが作品や手紙などで披瀝している農民像を年代順に辿り、その基本的特性や変化を明らかにする。

## 4. 研究成果

### 「研究の方法」(1)の成果の概略

アリストテレスは、市民の人的本性は、共和制国家の公共的活動に参加することによって完成されるとして、徳を公共善に献身することと捉えた。このような共和主義の理念はローマに引き継がれ、公共善の中核は、市民自らが統治する自由であり、この自由を外国の侵略や僭主の恣意的意志から守ることが肝要とされた。そして内外の敵から自由を守る根源は、徴兵に応ずることも含め、各自の公共的義務遂行を可能にしてくれる、自立する農地所有に求められたのであった。

ルネサンス期に共和主義を復活させたマキャベリは、メディチ家の専制や外国からの侵攻を受けて弱体化した祖国フィレンツェ共和国の再生のために、共和制ローマが衰弱した理由を考察し、その原因をa. 傭兵制の導入とb. 市場経済化による富の不平等が引き起こした腐敗や奢侈の風潮に求めている。そしてa.の改善策として民兵制の導入、b.に関しては、市民を清貧に保つ制度こそ自由な国家が持つべき最も有益なものと考え、「農地法」によって土地所有制度を改革し、富の平準化を試みた、ローマ時代のグラックス兄弟の改革を高く評価したのであった。

17世紀のイングランドでは、ハリントンやシドニーが共和主義を引き継ぐ。この時代の共和主義の代表的著作である『オシアナ』(1656)でハリントンは、統治を、人々が共通の権利と利益を尊重しながら市民社会を設立し、それを維持する技法と捉えている。だが、「近代の深慮」に基づき自己の利益を追求する為政者により、統治は腐敗し、墮落する傾向を有している。それを阻止するために彼は幾つかの提案をしているが、「農地法」もその一つである。彼によれば権力の源は富であるが、富は一定の土地により産出される。富の集中は権力の集中と腐敗に通ずるので、ハリントンは2000ポンド以上の土地所有を禁ずる「農地法」の制定で、墮落を予防しようとする。また、土地を所有することは、傭兵からは得難い愛国心の根源なので、農地を所有し経済的に自立した国民が、自ら戦費を調達して国を守る民兵制こそが望ましい防衛体制である。さらに、農業は堅実な気質を育むので、共和国の最善の土台でもある。

本来「共和主義」は反王政を意味していたが、そこに内包されている意味合いが、状況に応じて抽出されてきたので、この語句は多様に用いられてきた。18世紀前半のイングランドでは、反王政の色彩は薄まる。しかし古代ローマの継承者たらんとするこの国には西洋古来の共和主義の理念が浸透し、それが財政改革により常備軍と官僚体制を維持し、恩顧主義により影響力を拡大する宮廷派を、腐敗・墮落・奢侈として批判する根拠になっ

た。また、18世紀後半のイングランドでは、産業革命、農業革命により生産力が著しく向上したことにより消費革命が進行した。そして、国民の生活、思考には、奢侈に流れる風潮が強まった。この現象は、都会の墮落が、素朴な田舎を侵略するものと捉えられ、その批判が共和主義の言辭でなされた。

さらに、1789年にはフランス革命が始まったが、この革命の理念には、ルソーなどを通じて共和主義が色濃く反映されていた。そしてこうした共和主義への傾倒は、イギリスで革命を支持した、セルウォールやゴドウィンなどの若き活動家にも見られたことはGregory Claeysの*Journal of Modern History* 66(1994): 249-90ページに掲載された論文などから明らかである。

以上のように、古代以来一貫して、共和主義においては、清貧な小土地所有自営農民が健全な国の支柱と見なされていた。

「研究の方法」(2)の成果の概略

#### (1) 歴史書、農業書、地誌書

17世紀から18世紀にかけて、イングランドでは地方史への関心が高まり、各地の地方史書が発刊された。ニコルソンとバーンの*The History and Antiquities of the Counties of Westmorland and Cumberland* (1777)は、湖水地方を扱った最初の地方史書である。この書ではウェストモーランドの農業について、土地はやせ、未開拓のところが多い、スコットランドからの来襲に備える必要から生まれた小規模借地での労働集約型の経営が行われている、などと記述されている。

ウィリアム・ハッチンソンの*The History of the County of Cumberland* (1794, 97)は18世紀に公刊されたもう一つの湖水地方史書である。彼によれば、ノルマン人のイングランドへの封建制度の導入は、隷農を慣習的土地保有農民にするという大変革をもたらした。だが湖水地方の土地所有制度にはその後の進展がない。そのため借地相続税などの前代の遺物のような制度が継承され、それが農業の改良を阻害している。なお、この書の第2巻(1797)には“statesmen—the owners of small landed estates” (2:415n)という注が見られる。

トマス・ウェストの*The Antiquities of Furness* (1774)は湖水地方の周辺に位置するファーネス修道院の歴史を辿ったものであるが、その導入部(i-liv)では、ファーネス地方の歴史や住民についてもかなり語られている。そのxxiiiページには“One general obstacle to the improvement of Furness, and the advancement of agriculture in it,”で始まる段落がある。ここでウェストは、ファーネス修道院の借地人にはスコットランドとの国境での兵役が課せられたこと、修道院長が隷農を慣習的保有農民にした際

に借地を4分割し農民に担当させ、相互に助け合いつつ農業を維持させたこと、などを記載している。彼は、この修道院の土地保有制度は、スコットランドとの紛争が多発した創設当初は有効であったが、こうした古い制度は、現状では農業近代化を妨げる障害であると指摘している。

次に農業書について見ていきたい。代表的農業書であるアーサー・ヤングの*A Six Months Tour through the North of England* (1770)は、湖水地方の囲い込みの現状などには触れているが、農民生活については十分な情報を与えてくれない。その点に配慮しているのは1794年に初版、1797年に増補版が出た、カンバーランドとウェストモーランドの農業委員会報告である。紙幅の都合上、ここでは1797年のウェストモーランド報告のみを取り上げる。この報告書では、次のことが述べられている。この州の土地の大部分を、年収10~50ポンドの小土地保有者が、慣習的保有権により所持し、領主に種々の貢納義務を負っている(第2章)。この州では「ステイツマンや借地農」の土地が入り組んでおり、効率的農業を営む上で不都合である(第3章)。小規模ヨーマンは、借地農と区別する必要上ステイツマンと呼ばれている(第4章)。こうしたステイツマンは勤勉で自立心が強く、上からの圧力を嫌うが、近年急速に減少している。道路網が整備されロンドンの風潮がもたらされると、悪弊に染まり出費がかさんだステイツマンが、父祖伝来の土地を手放し、その地で労働者として働かざるを得なくなったからである。これは憂慮すべき事態だが、農業改良にはプラスである。

湖水地方を扱った地誌書の代表的なものはジョン・ハウスマンの*A Topographical Description of Cumberland, Westmoreland, Lancashire* (1800)である。カンバーランドとウェストモーランドの住民を扱った項でハウスマンはそれぞれの州を三つの地誌的特徴に分けて論じている。ウェストモーランドの第3の範疇に属するのは、山岳地の谷あいの住民である。彼らは他の地域と交流がなく、代々継承してきた土地で暮らしており、飾り気がなく正直で親切である。保有する土地は小さく、貧しく質素だが、自立心が強く自由を尊び、他人をよくもてなす。ハウスマンは彼らをステイツマンとは呼んでいない。だが、ウェストモーランド住民の生活を紹介する数ページ前で、「亜麻や麻は50年前には小屋住みやステイツマンにより広く栽培されていたが、現在では殆ど見る事ができない」と述べ、注でステイツマンを“a small farmer who occupies his own estate”と定義している。

#### (2) 水地方への旅行記・旅行案内

湖水地方への旅行案内書で、この地方の農

民に最初に触れたのはトマス・ウェストの『湖水地方旅行案内』(1778)である。この書のロススウェイトの住民に触れた部分で、ウェストは次のような点に注目している。実り豊かで小さなエデンの園とも言えるこの地で暮らす農民は、勤勉で礼儀正しく、もてなしがよい。そのうえ純朴で、案内してくれた者に、わずかな謝礼を差し出すと、顔を赤らめた程である。また、ウィリアム・ギルピンは、湖水地方ピクチャレス区旅行記(1786)の第2巻で、パターデイルで年収わずか18ポンドの聖職を60年間勤め、1000ポンドもの遺産を残したマティソンという人物を例に挙げながら、この地の住民の質素、節制、儉約を称え、優雅洗練から距離を置くことが、こうした徳の維持につながっている、と述べている。

ジェムズ・クラークの『湖水地方実地踏査』(1787)での農民像は、ウェストやギルピンとは異なる角度からのものである。例えば、ウェストはロススウェイトの住民の素朴さを称えていたが、クラークはこの地の住民は30年前まであほの代名詞だったし、交通が便利になった現在でも、依然として昔流に固執しているときなしている。また、パターデイルはかつて平和と豊穡の地であったが、鉱山が開発され鉱夫が外部から浪費とふしだらを持ち込み、現在は悪習に染まっている、と言っている。そして、ギルピンが称賛したマティソンは、酒を売って財産を増やしたとか、彼の遺族が、瞬く間に遺産を浪費しつくした、といったよからぬ裏話を披露している。

このように、湖水地方旅行記・旅行案内にはこの地の農民のよき面、悪しき面が紹介されていたが、「ステイツマン」という語は18世紀末まで使用されていなかった。この語が最初に登場するのは、1795年のアン・ラドクリフの旅行記であった。彼女は1794年の旅行の折にスキドー山に登り、頂上で老人と出会った。彼は近隣の谷に住む農夫であったが、登山は大変だというので、これまで躊躇していたのであった。この老人をラドクリフは“a farmer and, as the people in this neighbourhood say, a ‘statesman;’ that is had land of his own.”と説明している。

この旅行記には、旅行の折の住民との交流が随所に挿入されている。例えば、ケジックへの途上でスリルケルドの村人の親切に打たれ、彼らの生活に思いを凝らしている。彼女によれば、この地の農場は小規模で都市から離れているので、住民は贅沢を知らず、社交から生ずる卑屈さがない。そして、  
The true consciousness of independence, which labour and ignorance of vain appendage, falsely called luxuries, give to the inhabitants of these districts, is probably the cause of superiority,

perceived by strangers in their tempers and manners, over those persons, apparently better circumstanced.

と述べている。彼女は、この地の住民を都市の人々と比較し、その慎ましくも独立心旺盛な生き方を高く評価しているのだ。そして、社交により人間性がゆがめられていないここには、真の慈善心も宿っているとも思う。ただラドクリフには、こうした住民をステイツマンとは呼んだ箇所はない。

湖水地方旅行記には、原稿は書かれたが出版まで至らなかったものも幾つか存在する。ジェームズ・プラムトリのものも、その一つである。彼は1799年に、スコットランドから湖水地方へと長期の旅行をしている。7月25日に彼は、エナーデイルで宿泊地を探し、“Jo Bowman, a statesman”を紹介されている。またワズデイル湖頭でもトマス・ティンソンというステイツマンの家に投宿している。そして、素朴なこの地は、市場町から隔たってはいるが、「彼らの農地は、彼らが消費する以上のものは殆ど生産しないので、市場町から離れていることは、さしたる重大事ではない」と見ている。彼は、「牧歌的素朴さが隠棲する」この地を、好奇心は旺盛でも、贅沢や悪徳を持ちこまない旅行者にのみ推奨するのである。

「研究の方法」(3)の成果の概略

ワーズワスはホークスヘッドの文法学校やケンブリッジ大学で伝統的な教育を受け、キケロの著作や、ウェルギリウスの『農耕詩』、ホラティウスの第2エポードなどの農民像に早くから親しんでいたものと思われる。そしてケンブリッジ時代に彼は、生活は質素だが勤勉で自立心に富み、共和主義の農民像に類似した記述を含む『農耕詩』の翻訳まで試みている。

ワーズワスはケンブリッジ在学中の1790年夏、アルプス旅行の折にフランスを通過した。また、1791年から1792年にかけて、フランスに滞在している。この時期はフランス革命の初期であり、彼が革命の最中に接した政治理論には、共和主義に通ずるものが含まれていた。自伝詩『序曲』(1805)によれば、当初彼は、知識不足のせいで革命をよく理解できなかったが、やがて“a patriot”(9:125)となり、“my heart was/Given to the people, and my love was theirs”(125-26)と感ずるまでになった。ここでの“a patriot”は、「愛国者」ではなく「共和主義者」の意味で用いられている。

彼がこのように考えるのは、湖水地方もケンブリッジ大学も血統や財産が支配する社会でなかったもので、“the government of equal rights/ And individual worth”(248-49)を樹立しようとするフランス革命の理念を当然と思ったし、フランス人の英雄

的行為に“arguments from Heaven that 'twas a cause/ Good” (289-90)を感じ取ったからである。さらに彼は、将校のボーピュイなどと親交を重ねるうちに、『序曲』第9巻 125-26行(上掲)のように考えるまで、革命を支持する気持ちを高めていったのである。さらに、ボーピュイとの語りから、彼が下層の人々に寄せる人道的同情からも深い感化を受けた。牛の世話をしながら編み物をする少女を見てボーピュイが、“’Tis against that/ Which we are fighting!” (519-20)と叫んだのは、彼の人柄を示す印象深いエピソードである。こうしてワーズワスは、フランス革命に自由で平等な理想社会実現の可能性を見たのである。

1792年10月、ワーズワスは帰国する。彼が革命の基本理念と共和主義的政治観を維持し続けていたことは、『言葉による情景スケッチ』(*Descriptive Sketches*, 1793)や「ランダフ主教にあてた公開書簡」(1793)などの帰国後の作品から窺われる。また、彼が終生共和主義に共感を抱いていたことは1802年のソネット“Great Men have been among us”などから看取される。現代のワーズワス研究において、彼の思想は変化し、青年期の急進派が時を経るにつれ保守化したことはほぼ常識化している。しかしながら、共和主義の理念への共鳴は、彼の人生に一貫して流れている。ただ、フランス革命が権力争いに陥り、ナポレオンが台頭するにおよび、ワーズワスは革命に幻滅し、理想社会実現の手段を革命以外のところに求めるようになるのである。

1795年からワーズワスは、妹ドロシーとイングランド西部地方に住む。そして、コールリッジの知己を得るなどして詩人として新たな方向に歩み出す。彼とコールリッジの交流から生まれてきた構想の一つが、哲学的な大作「隠棲者」ある。「隠棲者」はフランス革命が果たせなかった人類救済の夢を、詩的手段で実現しようとする、社会的使命を帯びた作品であった。彼はこの作品に1798年春から着手し、後に『逍遙篇』第1巻に含められる部分などを中心に1300行ほど書き進んだが、この時点では湖水地方と関連する記述は、そこに含まれていなかった。

1798年秋、ワーズワスは妹やコールリッジとともにドイツに渡り、半年を過ごしている。フランスから帰国してからこの渡独までの数年間に、湖水地方を舞台とした彼の作品は殆どなかった。ドイツ滞在中に彼は、後に自伝詩『序曲』に収録される「ワタリガラスの巣取り」、「ボート無断漕ぎ出し」、「クリスマス休暇」などの詩行を書いている。これらは湖水地方での彼の少年時代の体験に取材したものではあったが、この地方の住民生活を記述するものではなかった。

1799年暮れに湖水地方のグラスミアに転

居したワーズワスは、翌年に「隠棲者」の執筆を再開し、第1部第1巻となる『グラスミアの我が家』(B稿本)を書いている。その161-70行で彼は、グラスミアの谷を完全に調和の行き渡る世界として描いている。しかし、この地の住民が、その美しさに照応する心根の持ち主だ、などといった幻想を抱いているわけではない。山岳地では威厳に満ちている羊飼いや、酔えば下劣な言葉を吐くことを彼は熟知している。にもかかわらず、「ここでは労働により農夫の顔のバラ色が損なわれず、彼は炉辺と農地に仕えるのみで、健全で束縛を受けない自由人であること、人体や精神を破滅させる著しい貧困や寒さ、飢えがもたらす悲慘に、この地が縁がないこと、貧困者が助けようとする人の能力を超える重荷になっていないことは大きな恵みである」(439-48、大意)と述べる。そして、地所がその保有者以外の意図に縛られず、土地を耕す者がその土地の主人であり、父親が歩んだ山々を息子も歩むような地域に共通する力が、この地の住民の精神を保護している、と考えている。

1798年に出版された『抒情歌謡集』初版には、湖水地方に取材した作品が殆ど含まれていなかった。ところが、グラスミア移住後のものである『抒情歌謡集』第2版(1800)の第2巻では、収録された41編のうち、24編が湖水地方を舞台としており、この地方の扱いが大きく変化している。なかでも「兄弟」と「マイケル」は、この地の農民を扱った重要作品であった。ワーズワスは、政治家ジェイムズ・フォックスへの献本の添え状で、この二つの作品を読んでもらいたい理由を次のように説明している。近年の工業化と増税、物価高で、低い階層の人々の間で家庭的愛情と自立心が衰退している。だが、「マイケル」などの主人公の生活にはそれらが残っている。それは彼らが父祖伝来の土地で日々労働に勤しむ、ステイツマンと呼ばれる小土地所有自立農民だからである。

以上のように、湖水地方のステイツマンへのワーズワスの関心は、1799年の移住を機に急速に高まり、ステイツマンは彼の作品で重要な位置を占めるようになる。そのことをよく示すのは『序曲』(1805)の第8巻である。ここでワーズワスは、彼が最初に愛を感じた人間は、湖水地方の羊飼いであったと言う。自然が美しいだけでなく生活の場でもある湖水地方で労働に勤しむ彼らの姿が、彼の心に強く印象付けられたからである。古来羊飼いは、アルカディアのような土地で、安逸な生活を享受するものとして牧歌にうたわれ、そのような現実味を欠く牧人像は英文学でも継承されてきた。だが、湖水地方の羊飼いはそうした牧人とは異なり、厳しい自然の下で、過酷な労働を強いられていた。にもかか

わらず、彼らは「意のまま、自らのために働く、/気の趣くままに時と場所を選びながら」(152-53)。そして、日々の営みを他人に拘束されない「自由人」(387)と自覚しうる境遇を維持していた。ジョージ・クラブの『村』(1783)が示すように、18世紀後半には文学や絵画において、牧歌的非現実性への反動が起こっていた。これまで『序曲』の羊飼いや、もっぱら牧歌的非現実性への反動という側面から考察されてきた。しかしクラブが非現実性の代わりに提示するのが悲惨な生活なのに対し、ワーズワスの場合は、小規模農民の自由という共和主義の徳である点に留意すべきであろう。

ワーズワスの湖水地方の農民描写の決定版は、1810年に初版が発刊され、1835年に第5版に達した『湖水地方案内』である。ここでは2010年に法政大学出版局から出版された拙訳をもとに、その概要を述べていく。ワーズワスはこの書の「湖水地方の景色について」の第2部「住民の影響を受けて生じたこの地方の様相」で、住民の歴史を詳述している。彼は中世の農民の姿を、ウェストの『ファーネスの古事』(本報告書3ページ)を引用しながら描いているが、彼の力点の置き方はウェストと相当異なっている。両者の主な差異は、ウェストはファーネス修道院による慣習的保有農民への土地分割を農業近代化の障害と見るのに、ワーズワスはそれを平等な自立農民の出発点と考えている。さらに、農民のスコットランド国境での兵役に、共和主義の民兵との類似性を見ている、などである。

その後こうした農民の子孫、ステイツマンは山岳地の谷筋に進出し、小土地を囲い込んで農業を営んだ。そうした土地は経済的価値が低かったため、彼らの進出を妨げるものはなかった。こうして谷筋の上部には「羊飼いや耕作者の完全な共和国」(73)が形成された。この共和国は自給自足小農民の社会で、農民たちは「血筋を誇る貴族も騎士も、郷土住んでいないこの地で」、「彼らが歩み耕す土地は、500年以上にわたり、自分と同じ姓と血筋のものが所持してきた」(73)と自覚していた。

「羊飼いや耕作者の共和国」は1770年ごろまで続いたが、産業革命や農業革命の影響を受けて崩壊していく。この点が第3部「変化とその悪影響を防ぐための趣味の規則」で語られる。ステイツマンの主な収入源は土地と羊の生産物と、女や子供の手仕事から得られる収入であったが、彼らはイギリスの生産様式の近代化について行けなかった。その結果彼らは小さな農地での農業を維持できなくなったのである。

#### 結論

「研究方法」(2)の成果の概略から、湖水地方関連書籍でのこの地方の農民に関する記述は、1794年後を境に大きく変化したこと

が窺える。それまでこの地方の農民は辺境で時代遅れの農業を営んでいるとされたり、牧歌の色眼鏡で見られていた。ところが1794年の農業委員会報告で、明らかに共和主義の農民像に通ずる特徴を持つ、勤勉で自立心の強い小自営農民、ステイツマンの存在が紹介され、それが後続の湖水地方関連書籍の多くに採用されることになった。そのことは、すべてのステイツマンの用法が1794年以降であることから裏付けられよう。

ワーズワスが共和主義的農民観に早くから親しみ、共感を抱いていたことは明らかである。しかしながら、彼はステイツマンの存在について、1799年のグラスミア移住まで知らなかった。そのことは『抒情民謡集』の第1版と第2版の違いから窺えよう。彼は1799年秋以降に、ステイツマンに関する書籍や彼らの生活ぶりに接し、彼らに共和主義農民像の現代版を見た。そして、そこに理想社会実現の可能性を託し、「隠棲者」の一部となる「グラスミアの我が家」に導入したのである。

「研究成果の概要」で述べたように、ワーズワスの農民像と現実の違いを、彼の右傾化に帰する見解がある。これは、過酷な現実を描くことで政情不安をあおることを恐れた詩人が真実を隠蔽した、という見方である。しかしながら、湖水地方関連書籍での農民叙述やワーズワスとステイツマンの接点などから、彼の湖水地方の農民像は、彼の理想社会探究と深く関わるものであったと言えよう。理想社会探究と関わるからこそ、現実との齟齬が生ずるのが避けがたかったのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

小田友弥、湖水地方旅行書に登場するワーズワス、山形大学紀要(人文科学)、査読無、第17巻第2号、2011、121-139

〔学会発表〕(計1件)

小田友弥、ワーズワスの『湖水地方案内』の革新性、日本英文学会第82回大会、2010年5月30日 神戸大学

〔図書〕(計1件)

新見肇子、鈴木雅之、小田友弥、他、揺るぎなき信念 イギリス・ロマン主義論集、彩流社、2012、全466頁

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小田友弥 (ODA TOMOYA)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：20085468